

【一般演題4】 第20席

「難経における補瀉の考察」

兵庫 梅木 茂樹

難経は内経とともに古典鍼灸医学の原点である。

本書は八十一の項目から成り、臓腑経絡論、病因病症論、診察論、治療論について書かれており、内経の難解な箇所を注解するという形式をとっているが、特に脈論と治療論についてはくわしく、著者の独創的な理論も多く述べられている。

本書の治療論は、六十二難から八十一難に書かれており、その内容としては、

- (一) 要穴の性格と主治
- (二) 選穴の補瀉
- (三) 刺法の補瀉

について述べられている。

選穴の補瀉は内経においては体系化されておらず、難経に至って確立されたものと思われる。

また、刺法の補瀉については既に内経に詳しく述べられているが、難経の著者は自身の臨床経験から内経の理論を踏襲しつつも独自の補瀉論を展開している。

今回発表する刺法の補瀉は、七十難、七十一難、七十二難、七十六難、七十八難、八十難に書かれており、その主な内容は、

- 一、季節に対する刺鍼の浅深法。
- 二、深刺、浅刺の刺入に際しての手法と注意事項。
- 三、経絡流注に対する迎随の補瀉法。
- 四、浅深の補瀉法。
- 五、刺鍼中の補瀉の手法。
- 六、押手の手技。

などである。これらについて、内経と比較し、また、実地臨床の立場から考察をする。